

2013 年度第 9 回物学研究会レポート

「これからの建築を考える」

伊東豊雄氏

(建築家)

2013 年 12 月 2 日

伊東豊雄さんは2013年、建築界のノーベル賞といわれるプリツカー賞を受賞された世界的建築家として、建築界をリードしてきました。

そんな伊東さんは最近、建築設計のプロジェクトに加え、東日本大震災復興の一翼を担う「みんなの家」プロジェクト、そして新しい建築教育の実践の場としての「伊東建築塾」の主宰など、これからの建築や建築の新たな可能性を模索されています。その根底には「ライフスタイルを変えなければならない」というメッセージがあります。

今回は伊東豊雄建築塾の校舎（東京・恵比寿）を会場に、伊東さんの考えるこれからの建築、そしてライフスタイルの姿をご講演いただきました。

以下、サマリーです。

## 「これからの建築を考える」

### 伊東豊雄氏

(建築家)



01：伊東豊雄氏

こんばんは。僕は今、いろいろなことを考えながら、さまざまな建築プロジェクトに関わっています。まだよく整理できていない部分もありますが、今日はその一部をご紹介します。どうぞよろしくお願いいたします。

#### 1. 「みんなの家」プロジェクト

僕は2011年3月の東日本大震災以来、「みんなの家」というプロジェクトに関わっています。発生直後に被災地の避難所や仮設住宅を訪れて、自分がこれまで関わってきた公共住宅の壁が、そこにもあると感じ、今まで考えてきたことと完全にオーバーラップしていると思ったことがきっかけです。僕のほか、隈研吾さん、妹島和世さん、内藤廣さん、山本理顕さんという5人の建築家で、「帰心の会」を発足させ、「みんなの家」をつくり始めました。「帰心」とは各人のイニシャルに由来します。

「みんなの家」には3つの目的があります。1つは、「家を失った人々が集まって語り合い、心の安らぎを得ることのできる家である」こと。震災で家や家族、仕事などを失ってしまった人たちが集まって互いに心を通わせあえる場所をつくりたいのです。2つ目は、「住む人（利用者）と建てる人（建築家・施工者）が一緒につくる家である」こと。何をつくれればいいのか、住む人だけでなく、つくる側も一緒に話し合いながらつくることです。3つ目は、「使用する人々が復興を語り合う拠点である」こと。政府主導の復興計画では住民の意思をなかなか引き上げられないので、使う人たち自身が「自分たちの町をこうしていきたい」と考えるための拠点になってほしいと思っています。

## （1）陸前高田のみんなの家

「みんなの家」のプロジェクトでは、僕はできるだけ若い建築家と組んでみようと思っています。今日はそのうち2つのケースを紹介します。まずは、2012年11月に竣工した「陸前高田のみんなの家」です。これは乾久美子さん、藤本壮介さん、平田晃久さんという若手の建築家3人と私、そして写真家の畠山直哉さんの5人でチームを組みました。畠山さんは陸前高田出身で、今回の津波でご実家とお母様を失くされ、震災直後から被災地の写真を撮り続けています。

陸前高田は防潮林である千本松原が景勝地としても有名でしたが、「奇跡の一本松」として注目された1本を残して全て津波で流され、現在は何もない空き地になっています。実はそんな陸前高田で菅原みき子さんという女性に会い、「みんなの家」を一緒につくることになりました。彼女と何回かミーティングして、彼女の話から山裾で塩をかぶって立ち枯れてしまった杉を「みんなの家」の柱にするというアイデアが生まれました。2012年8月には上棟式を行いました。死んだ木を再生させて家を建てるという点に、復興の象徴的な意味を込めています。

なお、このプロジェクトは元々ヴェニス・ビエンナーレの日本館に建築プロセスを展示するという前提で始めました。何度もミーティングを重ね、若手3人の建築家は毎回スタディモデルを持ち寄ってくれて、全部で200個くらいになりました。試行錯誤しながら、螺旋形や切り妻式など各人のこだわりがコラージュされた不思議な家が完成しました。そして、全てがヴェニス・ビエンナーレに展示されました。

## （2）釜石市の漁師のみんなの家

釜石市では「漁師のみんなの家」を完成させました。こちらはアトリエ天工人の山下保博さんと、Ma設計事務所の水上健二さんに参加してもらいました。場所は港に面し、近隣には仮設の漁業加工施設や魚市場などもあります。ここにまず、バーレーンで再開発のために不要になった漁師小屋を再利用して小屋を建てました。実はこの漁師小屋は前々回のヴェニス・ビエンナーレでバーレーンのパビリオンにおいて展示され金獅子賞を受賞したもので、展示後にいただいたものを使っています。そして、隣にキッチン設備などもある母屋を付けました。ここは、若い漁師たちの情報発信の場になる予定です。

このケースで面白かったのは、地元の若い漁師の人たちが「今がチャンス」とばかりに若い感性で漁業を再興しようと努力していること。釜石の漁業はホタテやワカメの養殖などが

中心ですが、彼らは東京の消費者と直接ネットで結んだビジネスに可能性があると考えています。被災各地で若い元気な人たちが出てきています。

「みんなの家」はいろいろなメーカーの協力を得て、これまでに 9 軒の家が完成し、現在も数軒が進行中です。例えば、T ポイント・ジャパンの協力を受けた「みんなの遊び場」など、来年春には完成予定です。

### (3) K-port

これは「みんなの家」ではありませんが、俳優の渡辺謙さんが出資して気仙沼湾につくった小屋のプロジェクトです。縁あって、僕が設計を依頼されました。気仙沼は大型船も出入りする遠洋漁業の基地で、近くはかなり大きな魚市場もあります。小屋の窓からは港を出入りする船も見えます。

建築のきっかけは、宮城県が発表した防潮堤建設計画に対し、地元の若い漁師、安藤竜司さんがここに土地を買って建設反対運動を始めようとしたこと。それに気仙沼好きの謙さんが賛同したのです。完成した小屋は普段は喫茶店ですが、時々謙さんもきて、コンサートなどイベントを行ったりしています。K-port の K は謙さんの K、気仙沼の K、そして、絆の K かな。本当に灯台のような場になっています。安藤さんの小屋は謙さんの小屋の隣にあり、来年 1 月までには竣工し、2 軒がつながる予定です。この周辺の防潮堤計画は再検討されるようです。

## 2. 近代主義の建築の問題

ここからは少し話題を変えます。現代の建築家のほとんどが浸っている「近代主義の建築」には主に 3 つの問題点があると思います。1 つは「自然を排除する」。自然との関係を切ってしまうことです。2 つ目は「場所の違い（地域性）を排除する」。世界中どこでも同じ建築をつくらうという主旨です。3 つ目が「その土地に固有の歴史や文化を排除する」。だから、どこでも同じ建築ができるというわけです。こういう近代建築のおかげで都市が生まれ、20 世紀に急増した人口も吸収できたのですが、その結果、どの町もアイデンティティを失ってしまい、どこも同じような町になってしまったのです。

3 つの問題点を図式化して具体化してみると、まずは境界をできるだけ明確にしようとして、住宅や公共の建物などの空間はその機能によってグリッドや格子状に分割するという思想ができます。さらに、境界を明確にすると、その内部は自ずと人工環境になり、北方でも南方でも、1 階でも 30 階でも均質な環境になります。僕は、これでは人間まで均質になり、元気のない人を量産することになりはしないか、ここに風穴を開けたいという思いで、ここ 10 数年、建築に向かってきました。そんなことを考える上でも、被災地でのプロジェクトはとてもいい機会だと思って取り組んでいます。

### 3. 現在の私の試み

そこで、「これからの建築」では何がテーマかと考えてみました。思いつくままですが、1つ目は「明確な境界を曖昧にすること」で、2つ目は「自然エネルギーを利用すること」です。一般的に現代建築は内外の境界の性能を上げて、例えば断熱性を高めてソーラーパネルを付けたりしています。そうではなく、境界を曖昧にして風を入れるなど自然状態に近い環境にする。その結果、省エネルギーになる方法もあるのではないかと思います。

3つ目は「グリッドだけが幾何学ではないので見直してみる」ことです。4つ目は「場所の違いを大事にする」ことで、5つ目が「自然素材をもっと利用する」こと。これまでのように美しさを視覚的に捉えて抽象的な建築にするのではなく、自然素材を使うことで触覚などにも訴えるような建築も考えるべきではないかと思っています。

そんなことを考え試行錯誤しながら今、試みていることや今後やろうとしていることを少しご紹介します。

#### (1) 都会に土間と蔵を実現するモデル

これは境界を曖昧にした例で、今年3月、原研哉さんがプロデュースした「House Vision」という展覧会（東京・お台場）で展示されたプロジェクトです。建築家と住宅関連メーカーからなる7組のグループがそれぞれ与えられたテントの中に未来の住宅ビジョンを描くというものでした。

LIXILさんと組んだ我々のチームのコンセプトは、「都会に土間と蔵を実現するモデル」で、空間を3つに分けて家を構成しました。まず、空間の半分を土間にして半屋外空間にします。外壁にあたる部分はサッシでなく、ルーバードア。光や風、外からの視線を調節できます。床はタイルで打ち水もでき、BBQテーブルや縁台、風呂なども設置しました。

もう半分はサッシで区切り、キッチンなども入れて屋内にしました。でも、土間部分と完全に区別するのでなく、外から内へのグラデーションでつながるイメージです。屋内部分の奥には「蔵」にあたる閉じられた空間をつくりました。他の部分よりも安全で断熱性も高く、音も漏れません。

#### (2) 伊東塾恵比寿スタジオ 2013

「House Vision」のモデルをもとにしてつくったのが、この恵比寿スタジオです。ここでは自然素材を使い、自然エネルギーを最大限に利用することを実践しています。例えば、鉄骨造りですが、断熱性能を上げるため、鉄骨の両サイドの中と外にレンガを積み、空洞にしました。この中を空気が循環するシステムになっていて、夏は涼しい空気を循環させて地下のピットを冷し、上部から暑い空気を逃がし、冬は逆に温かい空気で地下ピットを温めます。今年の夏は少し暑かったですが、夕方になり風が入ると気持ちよかったです。冬はガス式の暖炉と両サイドにパネルヒーターの暖房を使います。

ここでは月2回、子ども建築塾をやっています。小学4年生から6年生の20人と1年を通して、家って何だろう、町って何だろうと考えてもらう塾です。建築学科の学生がTAとしてほぼマンツーマンで付いてくれています。以前、スタジオとして使用していたオフィス

ビルでやっていたときより子どもたちの表情が生き生きとしています。ここは屋外とつながったような造りなので、子どももリラックスできるのでしょう。

### (3) 台北世貿広場

これは幾何学を応用して面白いことができた例です。台北の国際貿易会館の広場をリノベーションしました。デザインは2つの円を回転させて軌跡をたどって描いたものですが、単純に円を組み合わせるよりも流動感が出ました。そこに石を張り、周囲に芝生を植えて仕上げています。

### (4) 台湾大学社会科学部棟

こちらも台北のプロジェクトで、国立台北大学社会科学部の学科棟と図書館を手がけました。上層階は研究室、下には講義室や会議場、テラスなどがあります。大学なので空調設備を全部には入れられないため、一部の個室で空調した冷気を再利用し、風をうまく通路に逃がして心地よい空間になるよう構造を工夫しました。

図書館の開架式閲覧室は木陰で本を読むイメージで、既存の木なども利用してデザインしましたが、ここに幾何学を応用しました。放射状のパターンを使い、全3カ所の中心から放射状に屋根と柱の配置を決め、それぞれを連続させています。放射状にしたことで柱の密度の濃いところと薄いところが交互に出てくるので、グリッドでつくる柱の配置とは異なる面白い空間になりました。また、台湾は竹細工で有名なので、家具には竹を使いたいと考え、藤江和子さん（多摩美術大学客員教授）にお願いしました。藤江さんは竹の集成材で、きれいな書架をつくってくれました。建築は出来上がりしましたが、正式オープンは来年の秋ぐらいです。

### (5) みんなの森 ぎふメディアコスモス

こちらはまだ工事中ですが、自然素材や自然エネルギーを多用した例です。県立岐阜医大が移転し、岐阜市が買い取った90m x 80mという広大な跡地に、2層構造で市民が交流できる場を提案しました。駅に近い立地で、向かいには将来、市庁舎が入るようです。

1階の広場はオープンなイベントスペース兼ギャラリーやレストランなどがあり、またNPOやボランティアがワークショップや作業を行う多目的スペース「市民活動交流センター」になる予定です。2階は閲覧スペース。スパイラル状に書架を配置し、その中央にグローブと名付けた閲覧スペースが全部で11個置かれています。グローブはスチールのリングが数本入るほかはポリエステルの三軸織でつくっているのととても軽く、また曲面屋根は薄い板を積層し、つくられます。グローブは直径14m、12m、8mの3サイズあり、「子どもが閲覧するためのグローブ」などそれぞれ個性のあるデザインにしています。

また、一般道路と平行する長さ300mほどのプロムナードも、まもなく3分の2ほどがオープン予定です。今春、東大教授を退官されたランドスケープ・アーキテクト、石川幹子さんと一緒にデザインしました。長良川からの豊富な地下水を利用してせせらぎをつくり、桂

の木を4列並べた並木が育つ予定です。

このプロジェクトでは、消費エネルギーを従来の同規格の建物の半分にするというテーマにも取り組んでいます。例えば、空調は輻射冷暖房システム。地下水をくみ上げて熱交換し、2層にしたコンクリート床に流し、そこから出た冷気や熱気を循環させながら自然力で2階まで上昇させ、最後に夏は屋根の頂部を開いて熱気を排出させ、冬は閉じて小さなファンで循環させます。太陽光や雨水なども活用しています。木造の屋根は岐阜の檜を使う予定なので、完成後3年ほどは檜の香りが感じられるでしょう。2014年12月頃、竣工予定です。

## (6) 台中メトロポリタンオペラハウス

最後は、台中市で建設中のオペラハウスのプロジェクトです。400m x 300mほどの公園内に3つの劇場（2000席、800席、200席）が複合した施設になる予定ですが、実はとても苦労しています。2005年冬にコンペティションがあり、翌年から工事が始まって8年、まだ工事中。8年間で周囲には高層マンションが立ち並び、様相がだいぶ変わりました。ようやく来年1月には上棟式ができる運びで、来年12月に開かれる映画祭に合わせて大ホールがオープンし、2015年前半には完全オープンの予定です。

これは構造がとても複雑で、日本のゼネコンに断られ、ようやく台湾で地元の建設会社が請け負ってくれました。外と内が連続している建物をつくろうと、縦と横に伸びる2組のチューブが連続する空間のなかに劇場を配置しています。元々のイメージは身体を貫くチューブで、例えば口から入った食べ物が食道を通過して胃に入り、最後はお尻から抜けていく消化器官のようなチューブ。生物学者の福岡伸一さんいわく、「胃の中は人間にとっては外」らしく、そういう内とも外ともつかない空間に感心があったのです。

僕は基本的に、人間は屋外にいるときが一番自由だと思っています。人間も動物だから。でも、建築物に入ると外との関係が絶たれ動物的センスを失ってしまう。だから、少しでも外に近い環境がつかれないかと考えているのです。ただし、この台中の提案は少し観念的に内と外を連続させようとしていた気がします。岐阜の例のほうがもっと物理的に内／外が連続する建物になるだろうと思っています。以上、僕が今、試みている例をいくつかご紹介しました。

最後に、この写真は20年ほど前、タイ・バンコクの運河を旅したときのものです。現地の人たちは運河のほとりに住み、魚のように河の水で洗濯し体を洗い、雨水をためて飲んでいました。この様子に、僕も田舎で育ちましたから、「人間ってこういう存在だったよな」と感じたものです。

そんな風に、「人は自然の部分である。建築も自然の部分である」ことをふまえ、我々は次の時代にどうやって対処していけばいいのだろうか、そんなことを日々、考えて建築と向き合っています。

## Q&A

**Q1:** 伊東塾のプレオープンの翌日が東日本大震災だったと記憶しています。3.11 に直面して衝撃を受けられたことや、建築や街づくりに対する考え方に変化などがあれば、教えてください。

**A:** 震災発生時は東京で打ち合わせ中でしたが、オフィスが壊れるかと思うほどの揺れで、すぐにビルの外に避難しました。震源地が宮城県沖だと分かり、せんだいメディアテークに連絡しましたが、その日はつながりませんでした。その晩は僕も歩いて帰宅しましたが、同じように歩いている人たちとの間にある種の連帯感を感じたことを覚えています。

その後、被災地に行ってみると、家や仕事を失ったり、家族を亡くした人さえいるのに、意外にもみなさん、いい笑顔。不謹慎かもしれないけれど、こんなときにこそ人間は明るくなれるんだと感じたのです。そして、こういう人たちに対して僕はいったい何ができるんだろうと思った。それが被災地に行き始めたきっかけです。被災地にもいろいろな人がいるし、地域によっても考え方が違っていました。そういうときだからこそ、わかりあえることもありました。

そんななかで、僕は建築家という鎧を捨て、ただの人間として何ができるのかと考えて始めたのが、「みんなの家」です。だから、建築としてはデザインになっていないかもしれませんが、でも、そういうことを一度やってみて、そのときに自分が何を感じ、何が起こるか見てみたいと思ったのです。もうじき3年になりますが、「みんなの家」は表現のレベルとしては過去のものとは違うけれど、考え方としては違っていないと感じています。

**Q2:** 私は建築に詳しくはありませんが、今のマンションは一つひとつが独房のように感じてしまいます。全部がちっと区切られていて、周囲とのコミュニケーションも取れない状態。だから日本人には人間関係のシャッターまで下ろしている人が多いのではないかと感じます。こんな状況について、どのように思われますか？

**A:** 僕も以前は東京を向いて建築を考えていたし、建築を考えることは都市を考えることでした。でも、今はたしかに都市のマンションなどを考えていると、つまらないと思う。僕は今、日本は地方から元気にならなくちゃだめだと思っています。地方から何かが起こることを期待していますが、それには若い人がもっと田舎に暮らすようになることが必要でしょう。最近の内閣府の調査によれば、都市に住む20代の若者の3分の1は、田舎で暮らしたいと思っているようです。東京の魅力が減り、飽きられてきたようにも思うし、消費構造が変わり、自然の暮らしに近いことを求めているのかもしれません。

僕は、被災地で「これが復興のモデルだ」というまちをつくることができたら、若い人ももっと引きつけられていたのではないかと思うのですが、残念ながら3年間やっていて忸怩たる思いが強いです。でも、被災地には若くて元気な人がかなり現れているし、可能性はまだあると思っています。



**Q3:** 私は先生が震災後に出版された本、『あの日からの建築』を読んで、その中に書かれていた「自然への信頼や人間への信頼を失ったところに建築なんてありえない」という言葉が印象的でした。夏の暑さや冬の寒さ、台風といった自然の脅威によって自然への不信感を募らせ断熱などを考えたように、人間関係、例えば近所づきあいや親子間でさえ、面倒だと思い、部屋を仕切って個室をつくるようになりました。今日の話の中心は自然でしたが、人間関係についてもお考えがあれば、お聞かせください。

**A:** 今の日本は安心や安全をベースに、管理されながら動いています。たしかに、子どもはここ、お年寄りはこちら、と空間を分ければ管理しやすいけれど、それが人を個人個人にバラバラにしている気がします。例えば、ある公団の集合住宅の建築で、住民用のBBQテラスを提案したところ、公団から「誰が管理するのか」と許可されなかった。管理という言葉で人と人との交流が絶たれた例です。逆に、せんだいメディアテークでは、本を読むお年寄りの横で、子どもたちが走り回っていますが、誰もうるさがりません。おそらく壁のないデザインにしたことで、屋外に近い公園のような場だと感じられて、気にならないのではないのでしょうか。つまり、環境のつくり方によって人間の関係も変わっていくように思います。

以上

2013 年度第 9 回物学研究会レポート

「これからの建築を考える」

伊東豊雄氏

(建築家)

---

写真・図版提供

01 ; 物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2014 BUTSUGAKU Research Institute.